

Title	ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』について
Author	図越, 良平
Citation	人文研究. 34 卷 9 号, p.588-612.
Issue Date	1982
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

ヘルマン・ヘッセの 『車輪の下』について

図 越 良 平

I

小説『車輪の下』は、大部分1903年から1904年にかけて、ヘッセが生地カルフで両親の家に滞在中に執筆され、ガイエンホーフェンで完成した。そして翌1905年4月から5月にかけて『新チューリヒ新聞』(*Die Neue Zürcher Zeitung*)に連載小説として35回にわたって掲載される一方、『芸術番人』(*Der Kunstwart*)にも発表された。書物の形としてS. フィッシャー書店から出版されたのは、1905年10月、ヘッセ28歳の時である。(但し、書物の出版年の記載は1906年となっており、普通はそれをもって成立年とされている。)

まずこの頃のヘッセの実生活および創作活動を眺めてみると、1903年の春、一年半ほど前から勤めていたバーゼルのヴァッテンヴェール古書店を辞め、第二回目のイタリア旅行をほぼ4月いっぱい、今度は後に妻となるマリア・ベルヌリを伴って行なう。ミラノ、フィレンツェを経てピサ、ジェノヴァまで行き、彼女はそこからバーゼルへ引返すが、ヘッセはさらにヴェネチアまで足をのびしている。そして同年5月末の聖霊降臨祭の日に、彼は父の反対を押切り、彼女と婚約する。秋には同郷の詩人エーミール・シュトラウスを訪れ、自作の朗読の誘いを受けたりしている。翌1904年2月には、かの有名な『ペーター・カーメンチント』が出版され大成功をおさめた。続いて4月には小伝『ボッカチオ』が刊行されるが、この月に三週間ミュンヘンに滞在し、はじめてザムエル・フィッシャーと顔を合わせ、また彼を通じてトーマス・マンと知合いになる。さらにリカルダ・フーフをも訪問している。そして8月上旬にはマリア・ベルヌリと結婚し、ボーデン湖畔の村ガイエンホーフェンへ移り新婚生活をはじめるのである。秋にはウィーンの「バウエルンフェルト賞」を受賞し、小伝『アッシジの聖フランチェスコ』が刊行さ

れる。作曲家のオトマル・シェックやフォルクマル・アンドレーエ、指揮者のフリッツ・ブルーンと面識を得、画家のアルベルト・ヴェルティ、医師で作家のルートヴィヒ・フィンク、作家のエマヌエル・フォン・ボードマン、同じく作家のヴィルヘルム・シュッセン等との交際が始まるのである。²

このように見てくると、『車輪の下』は、『ペーター・カーメンチント』の成功によって作家としての地位と名声とを獲得したヘッセが、続いて世に問うた作品であり、同時にこれは以後八年間にわたるガイエンホーフエン時代の最初の記念すべき小説ともなったのである。この小説もまた大好評を博し、またたくまに多くの版を重ねるに到った。³ ベットガーは、もしも『ペーター・カーメンチント』のすぐ後にこの物語が出なかったならば、ヘッセの文学的名声はかくも早く確立しなかったであろう、と言っている。⁴ では、なぜこの作品がそれほどまでに、世間に受け入れられたのであろうか。新進気鋭の作家の新作ということが人々の関心を大いに引いたのかも知れない。しかし、もっと大きな理由は、この小説が、19世紀末から20世紀初頭にかけて流行した生徒小説 (Schülerroman) および少年小説 (Jugendroman) の系列に連なるからであろう。以下この頃に書かれた少年を主題とする作品ないしは作中人物としての少年の名を具体的に、幾つかの研究書に従って挙げてみよう。まず叙事文学では、エルンスト・フォン・ヴィルデンプルッフの少年物語、トーマス・マンの『ブッデンプロック家の人々』(1901)の中の少年ハンノ (Hanno)、エーミール・シュトラウスの『友人ハイン』(1902)、ハインリヒ・マンの『ウンラート教授』(1905)、ローベルト・ムージルの『候補生テルレスの惑乱』(1906)、フリードリヒ・フーフの『マオ』(1907)、リルケの『マルテの手記』(1910)、それに、カール・シュピッテラーの随筆『わが幼年の体験』(1914)などがそれであり、一方、戯曲では、フランク・ヴェーデキントの『春の目覚め』(1891)、アルノー・ホルツとオスカー・イエロシュケの合作『トラウムルス』(*Traumlus*) (1905)、ゲオルク・カイザーの『校長クライスト』(1905)などがある。⁵ これらの中で、『車輪の下』との比較において、とくによく引合いに出されるのはやはりシュトラウスの『友人ハイン』である。両者とも学校と家庭との重圧のもとで、才能豊かな少年が破滅して行く過程を描いている点で非常に類似しているからであろう。

ところで、このような類の文学作品が、この時期にかくも多く創作されたその背景はいったい何であろうか。それは当時のドイツの学校および教育制度に、幾多の深刻な問題が潜んでいたからに他ならない。ポウルビイは、ニ

ニーチェが16歳の時（1860年）プフォルタの寄宿学校で作った詩の中に、数十年後のドイツに風刺的な抗議の文学、すなわち、いわゆる学校文学（Schulliteratur）を生みだすのを助長した感情が早くも表現されているとの指摘をしている。そこに引用された詩の大意は、「自分は学校時代が苦しいものであり、いかなる労苦も容赦されることがないことをよく知っている。魂は束縛を逃れたく、感じやすい心は孤独の中へ逃避したい。だが、こうした重苦しさも、慰めに満ち気高さに満ちて自分に訪れる誠実な友情によって軽減される」というものである。⁶ 学校文学は主として1890年から1914年にかけて栄え、⁷ 「主に子供と形式的な教育制度との間の衝突を取扱う」ものである。⁸ ベットガーは少年小説のテーマを「学校と両親の家の誤った教育の犠牲になる無理解に苦しむ子供」と規定している。⁹ 当時のドイツの教育問題に関する彼の説明によれば、資本主義が帝国主義の段階に移行するにつれて、あらゆる陣営から学校の現状改革を呼びかける批評家が現われ、すでに1889年以来、「教育理念の再喚起」を主張する「バイエルン学校改革協会」が存在し、さらに1900年にはスウェーデンの女権論者で革新的教育者でもあるエレン・ケイ（Ellen Key）の著書『子供の世紀』（*Das Jahrhundert des Kindes*）のドイツ語版が出版された。その中で彼女は、子供の力を思う存分に「成長させること」、そして系統的な知識の伝達をやめるよう求めたのであった。かくして、ドイツの教育学にルソー・ルネッサンスがはじまった、¹⁰ というのである。

それでは、教育の批評家たちが問題とした具体的な事例は何であったか。ポウルビイも、19世紀末の最後の二十年間に、ドイツの高等学校改革のための運動（古典語と数学に基づく伝統的カリキュラムの現代化）がもちあがったことに触れ、さらに彼は多くの議論の背後に、表だっては口にされないが、かのニーチェの詩句が明瞭に提起している問題、すなわち、ドイツの学校制度はその半ば軍事的な気風と規律、長い授業日、知的才能や勤勉さに対する褒賞によって、感情生活に取返しのつかぬほど害を与えたのではないか、あるいは少なくともその制度は人々を、ニーチェの忌み嫌ったあの「教養俗物」（Bildungsphilister）に変えたのではないか、という問題のあったことを述べ、続いて1890年に出版されたユリウス・ラングベーン（Julius Langbehn）の書『教育者としてのレンブラント。一ドイツ人によって』（*Rembrandt als Erzieher. Von einem Deutschen*）がセンセーションを巻き起したことに言及している。それは、芸術と美的体験を主要なものとみ

なすような教育、過剰な知識を人格の調和的発達をゆがめるものとして重要視しない教育を弁護する攻撃的な書であった。生徒は教育によって、その最も深い本性を最高度に開発される必要性を説き、激しい言葉で公教育機関を攻撃するものであった。他方、このような状況の中で、高校生の中に自殺が頻繁に起こり、それがさらに学校文学を育てることになるのであるが、結局のところ学校小説は、単に学校制度に対する反抗ではなく、ヴィルヘルム二世治下のドイツの全般的な気風と19世紀末の統制的な知性偏重に対するそれである、とポウルビイは説明している。¹¹

『車輪の下』を読むにあたり、以上論じてきたようなドイツにおける教育問題とその時代背景を念頭に置くことは、作品のより深い理解のために有益であると思われる。ちなみに、この作品を書いた当時、ヘッセ自身、ある手紙の中で次のような考えを表明しているのである。「学校というものは、私が真剣に考えるところの、そして私の心を時々興奮させる唯一の現代の文化の問題です。私にあっては学校は多くのものを駄目にしてしまいました。そして、かなり著名な人物で、私と同じような目にあわなかった人を、私はほとんど知りません。学校では私はただラテン語と嘘をつくことを学んだだけなのです。というのも、嘘をつかなくては、カルフやギムナジウムではうまく切り抜けて行けなかったのです。そのことは、誠実であるが故に実際ほとんどカルフで殺されたも同然のわが家のハンス（ヘッセの弟）が示している通りです。彼もまた学校で駄目にされてからというもの、常に車輪の下じき¹²になっていたのです。」ここには若き日のヘッセの怒りの感情がこめられている。

Ⅱ

本作品のファーベルは次の通りである。「その優れた才能の故に、父やラテン語学校の教師たちから将来を期待され、神学校入学のための州試験に優秀な成績で合格するが、入学後、詩人肌で反抗的なある少年との出会いにより、彼との友情と学業との両立に悩み、そのために成績が下がるにつれて教師たちからも見放され、やがて身体に変調をきたして帰郷し、失恋の体験をもした後、機械工見習の職につくが、その三日後に水死するある小さな町の少年の物語。」

全体は7章から成り、第3章がやや長い程度で(32.5ページ)、他は各章とも極端なページ数の差はなく(19から27ページの間)、安定した構成をもっ

ている。そしてこれ以前の作品である『ヘルマン・ラウシャー』(1901)や『ペーター・カーメンチント』(1904)との大きな相違点は、それらにおいては語り手が第一人称であったのが、本作品に到って第三人称に変わっていることである。ホイスはこれについて、ヘッセが「落ち着いた抑制された叙事的文体¹³」を見い出したと述べている。さらにベツトガーもこの点について触れ、「全体を見通して客観的に物語ることは、集中的な省察と自己の存在への距離とを前提とする。同時にそれは強められた観察力と人間とその周囲の世界への高められた関心を必要とする¹⁴」と説明している。作品は、最初の2章と最後の3章が主人公の故郷の町を舞台とし、中間部の2章すなわちマウルブロン神学校の場面を包むような形をとっている。ヘッセの故郷カルフの自然と生活を背景にした描写は読者に強い印象を与えずにはおかない¹⁵。例えば、第2章の美しい自然の中でのハンスの魚つりの場面をはじめ、第6章の秋に行われるりんご汁しぼりの明るく陽気な雰囲気、第7章では機械工場での労働の様子や、職人達の厳しくもまた朗らかでユーモラスな生活態度などが、結果的には暗い結末に終るこの作品の中に、さわやかさと彩りを添えている。一方、第3、4章は、いわばハンスの生活に重大な転機をもたらす場として、ヘッセが実際に入学したマウルブルンの神学校が実名で登場してくる。その修道院の佇まいをはじめ、生徒たちの入学や両親との別れの様子、神学校の生活などが具体的に美しく描かれている。さらに州の試験の行われる大都会シュトゥットガルトが、小さな故郷の町と対照をなすものとして、わずかながら姿を見せている(第1章)。時間設定についてみるならば、一応主人公の州試験受験の2、3週間前から¹⁶、翌年秋、故郷の川で水死するまでの一年数か月と考えられる。しかし、さらに細かく検討すると、主人公が以前三年間うさぎを飼っていたことや、二年前に水車を作ったりしたことまで述べられており(384)、さらに溯ってもっぱらハンスの幼年時代(とくに小学校に入学した最初の頃)を8ページにもわたって描いている個所もあるから(第5章後半)¹⁷、実際には筋の進行から定められるよりも長い時間が設定されていると見るべきかもしれない。本作品の中心モチーフは教育であり、さらに功名心、友情、恋愛、水による死、他に病気(頭痛)、憂鬱、幼年時代の追憶などのモチーフがある。

14歳の主人公ハンス・ギーベンラートについて考察を進める場合、その中心問題は、いったい彼の悲劇の原因がどこに存するのかということである。

まず彼の生い立ちを見るならば、父は仲買人兼代理店主で、金銭は重んじるがその内面生活たるや俗人のそれで、およそ情操的なものはもはや跡をとどめず、嫉みや妬み心の持主で、町の他の父親達と変るところがない。病気がちだった母はすでに何年か前に亡くなっている。シュヴァルツヴァルトのこの小さな町は極めて古風な習慣をもち、人々はといえば、役人を軽蔑しながら息子たちには学問を身につけその職につかせたいという望み薄な野望を持っている。何かしらここには狭苦しいこせこせとした雰囲気漂っている。このようなところへ天才的な子供ハンス・ギーベンラートが現われたのであるから、当然彼は町中の注目の的になる。回りの人間から特別な目で見られ、ラテン語学校の教師たちからは激励され、同級生からは羨まれ、息子自慢の父から期待をかけられれば、それが彼にとって多大の精神的重圧になることは自明である。そこから生じてくるのは、彼の気の弱い物怖じした態度であり、同時にまた自尊心であり功名心である。例えば州の試験の際の彼のやや異常なばかりのうろたえ方と、一方、合格後のいかにも思い上がった態度はどうか。受験場のあるシュトゥットガルトでは、急に陽気になった父親とは対照的に無口になり不安になる。叔母から118人の志願者中合格するのは36人と聞かされるや、元気をなくし、頭痛を催し食欲もなくなる。恐しい夢（試験場で山積された嫌いなチョコレートを食べるように命じられ、食べるにつれてそれがさらに増えて行く夢）を見る。（これは、試験の不出来を極度に恐れる心の現れであろう。）父と訪ねた知合いの家では、ゲッピンゲンから来たラテン語通の受験生と話を交わすと、とたんに相手が偉く思われて自信を喪失してしまう。ギリシア語の試験の後では失敗を悔いるあまり、すっかり意気消沈し、出来具合を尋ねる父と口論さえ始めてしまう。わが家へ帰っても、不合格になった時のことを考えて心は一向に落ち着かない。

„Man würde ihn [Hans] als Lehrling in einen Käsladen oder auf ein Bureau tun, und er würde zeitlebens einer von den gewöhnlichen armseligen Leuten sein, die er verachtete und über die er absolut hinaus wollte.“ (398—399)

一般の大部分の人が就くと思われる職業に対するハンスのこのような軽蔑感、まさしく自尊心に満ちたエリート意識というものであろう。

さて、かくも焦躁感に駆られ小心翼翼々として試験結果を待っていたハンスが、二番の成績で合格したとの報を受け、校長から感想を求められた時、教室の皆の前で口にした言葉は、„Wenn ich das gewußt hätte, dann hätt

ich auch vollends Primus werden können.“ (399) というものであった。そしてこのように常に他を抜き、一番にならずには承知しない勉強態度は、神学校入学後も変りはしない。

ところで、難関を突破したハンスにとって本来十分に羽根を伸ばすべき楽しい夏休みに、まず町の牧師から、神学校での勉強に備えて新約聖書のギリシア語を每日一、二時間 (412)、続いてラテン語学校の校長からホーマーのギリシア語を日に一、二時間 (420)、さらに数学を専門の先生について週に三、四時間 (421) 予習する提案をされ、全く素直に受け入れてしまうのである。もとより頭脳明析で勉強好きなハンスのことであるから、勉学は捗り、早くも学問に対する畏敬と感激さえ覚えるようになる。例えば、新約聖書の一句一句にどんな謎があり、その解明のためいかに多くの研究者が努力したかを感じ、自らも真理の探求者の仲間入りをした気分になったり (416)、クセノフォンの最も難しい文章も辞書なしで読み進むことが出来るようになる。(417) 数学にはかなり苦しめられるが、それでも時々みごとな解き方をして楽しくなる。(421) ホーマーの読解では、神秘的なまでに美しい響きをもつ難解な詩句を前にして、焦燥と緊張に震えることもある。(422) それはまさしく滞りということ知らぬ秀才少年の溢れんばかりの能力の発揮を思わせるものがある。

だが、ここでよく注意して読むべき点がある。それは、この少年をしてかくも熱心に勉学に立ち向かわせる動機は何かということである。単なる純粹な勉強意欲ということからは必ずしも説明出来ぬものがそこにはある。それは明らかに名誉心ないしは功名心に基づくものである。町の牧師から休暇中に勉強の誘いを受け同意した時に考えたことは、新しい言葉を習う楽しみはあったにせよ、将来、神学校で仲間を押さえて行くことではなかったか。

„Denn das wußte er [Hans] wohl, daß er im Seminar noch ehrgeiziger und zäher arbeiten müsse, wenn er auch dort die Kameraden hinter sich lassen wollte. Und das wollte er entschieden. Warum eigentlich? Das wußte er selber nicht.“ (412)

この執拗なまでの競争心の目的を捉えられないところに彼の不幸の始まりがあるのではないか。勉学に精を出しながらも、「試験の不安と勝利のためにひそんでいた功名心 (Ehrgeiz) がふたたび目ざめて来て、彼を休ませなかった」(417) のである。それはまた自分に期待をかけている校長や教師や牧師を極端に意識し、彼等から一層の賞賛と尊敬を得たいという感情に支配さ

れた結果生じてくるものと考えられる。

„Wenn er [Hans] nachts mit leichtem Kopfweh erwachte und nicht wieder einschlafen konnte, befahl ihn eine Ungeduld, vorwärts zu kommen, und ein überlegener Stolz, wenn er daran dachte, um wieviel er allen Kameraden voraus war und wie Lehrer und Rektor ihn mit einer Art von Achtung und sogar Bewunderung betrachtet hatten.“ (417)

このようにみえてくると、ハンスにあっては、勉強はその本来の目的を逸脱して、いわば他人を知的に凌駕するための、また自己を飾りたてるための手段になってしまっているのである。したがって真理の探究と人間性の向上につながるべき学問によって逆に心を脅かされるという事態が発生してくるのである。先に「不幸の始まり」と述べたのはその意味においてである。しかし、思うに、その責任をハンス一人に帰するのは何としても酷である。なぜなら、校長、教師、牧師そして父親などみんなが「彼を鼓舞激励し、息もつがせず勉強させた」(413)からである。ハンスに余裕を与えず、ひたすら首席にこだわるようにさせた彼等にこそ大きな責任があると言わねばならない。そしてまたそうした結果を招いたのは教師たちの側の過剰な期待、自己満足それに名誉心であろう。そういったものは、町の牧師の „Du [Hans] weißt, daß wir alle Hoffnungen auf dich setzen. Im Latein erwarte ich besondere Leistung von dir.“ (383) という期待に満ちた言葉、語り手の „Dem Rektor war es ein inniges Vergnügen gewesen, diesen von ihm [Hans] geweckten, schönen Ehrgeiz zu leiten und wachsen zu sehen.“ (417) という説明、そしてまたハンスに直接 „Mir ist es Ehrensache, etwas Tüchtiges aus dir werden zu sehen.“ (421) と語りかける校長の激励の言葉などから容易にうかがうことができる。ボウルビイは、「校長と郷土の牧師はハンスを彼等自身の野心を隠すための一種の隠れ馬にした¹⁸」と述べている。こうした教育者や宗教家がハンスに及ぼした影響は精神的な面にとどまらない。受験勉強によるハンスの身体の疲労、發育不全、異常なまでに繰返される頭痛も、もとは彼等の過度の要求から生じたものである。¹⁹ホイスはこの作品を、「その静かで清らかな生命が、習慣と日常性の『好意的な』(wohlwollend) 恐ろしい機械によって傷つけられ、押し碎かれる²⁰」少年の物語と言っているが、この括弧つきの「好意的」という表現はもちろん反語的に用いられたもので、人々の過剰な「親切心」(実は抑圧

する力)を指すものとして実に適確であるといえる。ところで故郷の町の教師たちや牧師の実体がいかなるものであるかは、後に神学校から、かつての優等生ハンスが心を病んで戻って来た時の彼等のおぞなりな冷淡極まる態度によく現われている。

„Zweimal sprach der alte Rektor ein paar freundliche Worte mit ihm [Hans], auch der Lateinlehrer und der Stadtpfarrer nickten ihm auf der Straße wohlwollend zu, *aber eigentlich ging Hans sie nichts mehr an*. Er war kein Gefäß mehr, in das man allerlei hineinstopfen konnte, kein Acker für vielerlei Samen mehr; *es lohnte sich nicht mehr, Zeit und Sorgfalt an ihn zu wenden*.“ (490—491) (イタリックは筆者) 実際、彼等はハンスに知識を与える以外何も為さなかった。しかも人生の指針を示すべき牧師でさえ、単なる古典語の知識の伝達者にすぎず、人の悩みにせめて耳を傾けることさえできなかったのである。

さて一方、視点を神学校に移すならば、ここでも教師たちはハイルナーの逃走事件が起こった後は、その友人であったハンスにも疑いの目を向け、最初、すぐれたヘブライ語の能力をもつ彼を誇りにしていた校長も彼を見放し、軽蔑的な表情を浮べるのである。次第に頭脳が鈍ってきたハンスは授業時には教師から皮肉を言われ、またひどい叱責を受けるようになる。傷心のハンスに心を痛み、思いやりをもって接したのは、若い助教師ヴィードリヒ一人とあるが、彼の力だけではどうにもならなかったのである。ここまで辿ってくると、ハンスを窮地に追い込んだものが何であるか明らかになる。

真に理解に満ちた思いやりの心に触れ、それに導かれる機会が彼にはあまりに少なかった。子供の心を優しく包みこむべき母親に早く死に別れていることも大きな不幸に違いない。だが彼のことを親身に思う人物に全然恵まれなかったわけではない。敬虔派信者の靴屋の親方フライクは、愚かな父親以上に彼のことを気づかっていた。受験を目前にひかえたハンスに成功を祈りながらも、試験がすべてではない、かりに落第しても恥でないと言って落着かせ (382)、町の牧師が不信心であることを教え (414)、夏休みにまで勉強するハンスの痩せ細った身体をみて心配する。そして神学校入学のために旅立つ少年のため、両手を彼の肩に置き祈ってやるのである。(町の牧師にはそのような感情の細やかさはなかった。) フライク親方は、第3章から第5章まで登場しないが、第6章に到って、今は元神学校生徒となったハンスを、りんご汁搾りに誘っている。その時の彼は学校や勉強に関することは一

切口にしない。それは、束の間でもハンスに秋の収穫の喜びを味わわせ、憂いを忘れさせようという思いやりであろう。さらに彼がハンスに姪のエンマと二人きりで仕事をさせることにも、この若者に対する配慮が働いているように思えてならない。そして小説の最後で、ハンスの葬儀の終了後、去り行く教師たちを指しながら、*„Dort laufen ein paar Herren, die haben auch mitgeholfen, ihn [Hans] so weit zu bringen.“* (546) と言い、その言葉の意味を理解出来ずにただ驚くだけの父親には、*„Ach, nichts weiter. Und Sie und ich, wir haben vielleicht auch mancherlei an dem Buben versäumt, meinen Sie nicht?“* (546) と語るが、これは彼の悔いても余りある無念さの吐露ではないか。ハンスには、素朴ではあるがこのような人物が味方としていた。しかし、靴屋は町の牧師とは違い学者ではなかった。高い知識の習得を目ざすことに心を奪われたハンスには、彼の人生の知恵者としての賢明さと尊さが理解出来ず、いたずらに知識人としての牧師や教師たちに魅惑されたのである。つまり、ハンスを取り巻く知識偏重の環境にあっては、この親方の賢明さをもってしても、いかんともしがたかったのである。

ハンスを常に熱心な勉学に駆り立てたのは、すでに述べたように、彼の功名心であるが、これがいかにもろく儂いものであるかは、神学校での友情体験から明らかである。友人ヘルマン・ハイルナーから *„du tust all die Arbeit ja doch nicht gern und freiwillig, sondern lediglich aus Angst vor den Lehrern oder vor deinem Alten. Was hast du davon, wenn du Erster oder Zweiter wirst? [...]“* (448—449) と言われた時、恐らくハンスはそれまでの自分の生活の空しさを心底より悟ったものと考えられる。その後ハイルナーに対する一種の裏切り行為とその深刻な悩みとによって真の友情の尊さを体得したハンスは、神学校で上席を占めることこそ自分の理想であったと友人に告白し、さらに *„Ich will lieber Letzter werden, als noch länger so um dich herumlaufen. Wenn du willst, so sind wir wieder Freunde und zeigen den anderen, daß wir sie nicht brauchen.“* (464) と誓うのである。当然のことながらこの時よりハンスは友情を学業に優先させることになった。いったいハンスはハイルナーのどこに魅惑されたのであろうか。それはなによりも、ハンスの持っていない彼の豊かな詩的心情であろう。漂う雲に憧れ、ライン河を走る船の上の華かさにぎわいを思い出してはそれに酔い、湖と秋によせて詩作し、マウルブロン修道院の美しさを賛え、あるいはまた自作の詩や、シラー、シェークスピアを身振りたっ

ぷりに朗読し、恋の体験さえ語る彼こそハンスとはまさしく対照的な人物である。ハンスはいわば、ハイルナーによって未知の世界に開眼されたのである。ハンスが、ハイルナーに再度友情を誓った先の言葉は、ページ数の上から本作品のほぼ中央に位置するが、内容の点からみれば、この時以後、ハンスはもはや以前の優等生でなくなるわけであり、したがってここに本小説の転回点が存在する。ハイルナーとの友情が彼の神学校逃走事件を最後に完全に終止したことは、ハンスにとってまことに重大な出来事と言わねばならぬ。なぜなら学業よりも友情を選んだ彼には、今や生きる上での励みとなるべきものが全く失われてしまったからである。今さら以前のように勉学に戻ることが出来ないのは自明である。当然の結果として彼の成績は下降線をたどる。やがて身体の異常の発生と共に神学校を去らねばならなくなる。

一方のハイルナーはどうか。

„Den leidenschaftlichen Knaben [Heilner] nahm später, nach mancherlei weiteren Geniestreichen und Verirrungen, das Leid des Lebens in eine strenge Zucht, und es ist, wenn nicht ein Held, so doch ein Mann aus ihm geworden.“ (484)

もともと、この自由を求める少年は神学校など頼みとしていなかった。それ故、脱走後連れ戻された時も頑として謝罪しない。またハンスと違い、友情と勉強の板挟みになるような弱い性格ではない。彼は「自分自身の考えとことばを持っていた」(443)のである。実際、ハンス自ら、時々自分が友人にとっては「快いおもちゃ」(449)、「一種の飼い猫」(449)にすぎないと感じたくらいである。ハイルナーがハンスを必要としたのは、もっぱら自分の話に耳を傾け、憂鬱な気分を慰めてくれる友人を欲しかったからにすぎぬ。両者の大きな相違は、一方は生活力に溢れ敢然と自己の信じる道に進む性格であるのに反して、今一方は内向的で常に友に寄り添いながら引かれて行くという性質をもつということであるが、この友情は互いの人格を高めあうような対等の関係のものとはどうも言いがたい。ベットガーは、ハンスは精神的に早熟で攻撃的な友人の影響と刺激とをあますところなく消化しきれない、と述べている。²¹

さて、先にハンスにはハイルナーのような豊かな情感が欠けている旨述べたが、その原因は何であろうか。それは知識に偏した苛酷な受験勉強による極端な感性の軽視である。州の試験は俗に「生贄」(Hekatombe) (377)と呼ばれるほど厳しいものであるが、ハンスは文字通りそれに祭りあげられた

のである。語り手はもはや学業の継続が不可能になった少年に同情をよせ、心の成長に無理解な大人たちに激しい弾劾の言葉を浴びせかけている。

„Und keiner dachte etwa daran, daß die Schule und der barbarische Ehrgeiz eines Vaters und einiger Lehrer dieses gebrechliche Wesen soweit gebracht hatten. Warum hatte er [Hans] in den empfindlichsten und gefährlichsten Knabenjahren täglich bis in die Nacht hinein arbeiten müssen? Warum hatte man ihm seine Kaninchen weggenommen, ihn den Kameraden in der Lateinschule mit Absicht entfremdet, ihm Angeln und Bummeln verboten und ihm das hohle, gemeine Ideal eines schäbigen, aufreibenden Ehrgeizes eingepft? Warum hatte man ihm selbst nach dem Examen die wohlverdienten Ferien nicht gegönnt?“ (485—486)

人間が知識の習得にのみ追われ、感情面の育成を疎かにすべきでないことをこの言葉は表わしている。生きる力を失ったハンスには死への誘惑がつきまとい、最後には自殺の決意さえする。それと同時に彼は「現実ならぬ第二の幼年時代」(495)を味わおうとする。失われた幼年時代へ、病的なほどの憧れをもって立ちかえろうとするのである。しかし、所詮これは儚い追憶以外の何ものでもなく、そこから新たな力を汲み上げることにはできない。先に触れたごとく、語り手はハンスの過ごした幼き日々の模様を8ページにわたって描いているが(495終りから3行目—502)、結局主人公は二度と子供に戻れぬことを思い知らされるだけである。鬱々として日を送るハンスを待っていたのは、秋の日のりんご汁搾りの行事と、エンマとの恋愛体験である。第6章はすべてこの描写に当てられており、それまでの暗い雰囲気一抹の明るい光を投げかけ読者にほっと息をつかせる。それと共に、ここには性に目覚め行く少年の微妙な心理も巧みにとらえられている。だがその恋も失恋に終りいよいよ機械工として実社会に入るのであるが、それはかつての名誉ある神学校生徒の転落した姿を人前にさらすことであり、現に「州試験錠前屋」(Landexamensschlosser) (531)という辛辣極まるからかいの言葉をかけられることになる。ハンスが非常な苦痛と屈辱感に襲われたことは想像に難くない。機械工場に入ったのが金曜日(526)、二日後の日曜日に幼馴染みの友人アウグストに職人仲間の宴会に誘われ、帰宅途中で水死してしまう。つまり実際に働いたのはわずか二日間である。

それにしても、ハンスが自殺を決意してから、エンマとのひとときの恋愛

に生命を燃えたたせ、喜びかつ悩み、さらに機械工の生活を体験し、工場内で「労働の賛歌」(530)を聞き、日曜日には職人の集いに加わって陽気に振舞うまでになっている。読者は一瞬彼が立ち直りを見せるのではないかという予感さえ覚えるのである。いったいハンスの自殺の決意とその後のこうした生活状態とをどのように関連づけるべきか、戸惑いさえ覚えかねない。だが、自殺決意直後の語り手の次の言葉を思い返すと、この間の事情がいくらか明らかになるように思われる。

„Es [das Schicksal] mochte ja wenig an diesem verstümmelten jungen Wesen gelegen sein, aber seinen Kreis sollte es doch erst vollenden und nicht vom Plan verschwinden, ehe es noch ein wenig von der bitteren Süße des Lebens geschmeckt hätte.“(492)

ここで Wesen はハンスを指す。「人生の苦い甘美を味わう」とは、この後に起こるエンマとの恋愛であり、そしてまた職人仲間の集いであろう。そういったものは運命の定めたものであり、まずそれらを味わってからでなければ死ぬことが許されないと解釈できる。とすれば、すでに彼の辿る道は定まっている。つまり死への道以外あり得ないことになる。恋は、やがて燃え尽きんとするローソクが一瞬その輝きを増すのにも似た生命の最後の燃焼であり、他方、職人生活は、とくに日曜日の宴会は、この世における最後の人間的な喜びなのである。人並に恋をし、人々と同じように働いて楽しんだ後ハンスは死を迎えるのである。

主人公の水死について語り手はその原因を明確にしていない。

„Niemand wußte auch, wie er [Hans] ins Wasser geraten sei. Er war vielleicht verirrt und an einer abschüssigen Stelle ausgeglitten; er hatte vielleicht trinken wollen und das Gleichgewicht verloren. Vielleicht hatte der Anblick des schönen Wassers ihn gelockt, daß er sich darüber beugte, und da ihm Nacht und Mondblässe so voll Frieden und tiefer Rast entgegenblickten, trieb ihn Müdigkeit und Angst mit stillem Zwang in die Schatten des Todes.“(544—545)

しかし川中へ足をすべらせた単なる事故死とみるのは、あまりに単純すぎて、文学的味わいを損うであろう。勿論ここは、永遠の休らぎにつくべく死の誘いに応じたと考えるのが適切であろう。シュナイダーは、ギーベンラートの死は心理学的に周到に準備されたものであり、結局のところ、前々から「疲労困憊し」(gerädert)²²、文字通り絶望的な行為を余儀なくされたこの生

徒の生存の不安と生への倦怠の当然の帰結として、おのずからなる如く生じたものである、と解釈する。エンマに対する失恋は、たしかにそれを助長してはいるが、耐え忍んだ苦悩の升を溢れさせる最後の一滴にはなっておらず、死の思いはすでに「慰め手としての幽霊」(491)となつて彼になじみ、「必要なもの」(491)となつていた、と説明している。²³そして彼の自殺の思いを行動に移させた動機は、職人仲間アウグストとの過度の飲酒に対する「恥と自責」(544)であると述べている。²⁴一方、ベツトガーはこの死の意味づけを、「物語中で大そう暗示的に暴露されている若人の抑圧と束縛に対する抗議」²⁵であるとしているが、文字通りハンスがそういう意識を抱いて死に赴いたとは考えられない。むしろハンス自身はあくまで苛酷な教育制度の犠牲となつたが、その死が結果として無言のうちに世間に対する訴えとなつていと解すべきであろう。

Ⅲ

『車輪の下』はヘッセの自伝的色彩の強い小説である。しかし「自伝的」という言葉をあまりに狭くとらえ、主人公ハンスをヘッセの写し絵のように考えることは、もとより見当はずれであり危険である。その意味からⅡにおいては意識的にその内容をヘッセ自身の生活と関連づけることを避け、フィクションとしての作品そのものを眺めることにしたのである。とはいえ、自伝的要素を多く素材として用いて構成されている故、少年時代のヘッセの生活のあとを辿りつつ、本作品との類似点、相違点などを少し調べてみるのも興味深いことである。まず主人公の家族構成であるが、すでにⅡでも述べたごとく父は無教養な商人で、母はすでになく、ハンスは独りっ子であるが、ヘッセの父は厳格な牧師、母はまだ生きており(母の死は1902年4月、ヘッセ25歳の時)、それに姉妹(アデーレとマルラ)がいた。主人公は故郷の町のラテン語学校に通っているが、ヘッセは州の試験の受験勉強のため、ゲッピンゲンの学校でほぼ一年四か月学んでいる。(1890.2.1—1891.5.20)²⁶ツェラーによればそれは「ヘッセがよき生徒であり、先生たちを尊敬した唯一の学校時代」²⁷であった。とくにバウアー校長には教師の模範を見たのであり、後年(1953年)ある手紙の中で、もしも彼と彼に指導を受けていたクラスにみなぎる精神がなければ、『ガラス玉演戯』(1943)で描いたような理想的な学校の着想をつかむことはなかつた旨述べているほどである。²⁸『車輪の下』ではそういうところを反映している個所は見当らない。ここでは受験勉強も、

それとは無関係な一般生徒とは別に、教師や牧師の行なう個人指導として描かれている。ハンスがシュトゥットガルトの知り合いの家でゲッピンゲンの受験生に出会う場面は、ヘッセがかつて学んだ学校の名を記念に留めるべく描いたのかも知れない。ヘッセと母が招待を受けた知人の家では出会った受験生は実はカンシュタット出身の少年である。²⁹ 作中では志願者は118人とあるが、ヘッセの祖父の手紙では79名となっている。³⁰ 州の試験は1891年7月14日と15日の二日間、シュトゥットガルトのエーバーハルト・ルートヴィヒ・ギムナジウムで行なわれた。(この建物は第一次大戦後取壊された。)³¹ 作品にはこの学校の名は挙げられていない。ハンスは父に伴われて故郷の町から受験場に行ったが、ヘッセの場合は母が出向く。但しヘッセ自身はゲッピンゲンから直接その地へ行っている。ラテン語の試験の出来のよかったことは作品に描かれているのと同じである。母の手紙によると、ヘッセは二番目に答案を書き終えたとある。³² 試験後叔母の家へ帰る途中二時間暑い通りを迷い歩いたと作品にはあるが、(391)、これは実際にはなかった。³³

マウルブロン神学校の入学は9月15日であり、ヘッセは19日に母に伴われて行っているが、³⁴ 作品では父が同伴している。さて、入学後六か月たった翌1892年3月7日にヘッセは突然逃走する。小説中では逃走するのは主人公の友人ヘルマン・ハイルナーであり、この点でも実生活とは異なるが、この人物は頭文字がH.H.となることから、ヘルマン・ヘッセの分身といえよう。実際、IIにおいて眺めたように、彼はその詩人的性格から多分にヘッセを思わせるところがある。彼は脱走後退学させられるが、その後の生活について詳細はいっさい語られていない。ただ、「後に数々の天才的所業と迷いを重ねた末、人生の苦悩に厳しく鍛えられて、英雄とはいえないまでも、立派な人物になった」(484)と記されているのみである。ところでミレックはギーベンラートとハイルナーの両者とヘッセとの関係について、次のような興味ある考察を行なっている。「ギーベラートもまたかつてのヘッセである。そしてハイルナーは、もしもヘッセが自分の人生を大切と考えたならば、そうならねばならなかった人物である。前者が死に、後者が生き残ったということは、ヘッセが彼の人生において実際に生じた変化を象徴的に描いていることなのである。彼の内なる絶望的なギーベンラートは、ハンスの自殺とともに死に、彼の内なる前途有望なハイルナーが現われ出て、彼独自の道を行くのである。」³⁵ ミレックはこのように親友の姿の中に自己を二重に投影する方法をヘッセの散文に共通のものであると指摘している。³⁶ ハイルナーについて述

べられた「天才的所業や迷い」、「人生の苦悩」という言葉は、それだけでは抽象的で理解しにくいだが、神学校脱走後のヘッセの行動をよく見ればうなずける。主人公ハンスは夏休みの三週間前に神学校を去った後は、エンマとの恋愛体験があったりはしたが、もっぱら自宅で静養し、やがてその年の秋に機械工場に勤めるというたいへん単純な生活を送っているだけであるが、現実のヘッセの生活は、1892年3月の脱走事件から、1894年6月故郷カルフのペロットの機械工場に勤める二年余りの期間は、文字通り嵐の吹き荒れた時期である。以下、主としてケースター、ツェラー、それに詳細な年表を付しているプファイファーを参照しつつ、その間の事情にひとわり目を向けてみよう。³⁷

ヘッセは3月7日の午後2時にマウルブロン神学校を逃走し、翌8日正午頃警官に連れ戻される。12日には午後12時半より8時半まで監禁の罰を受けている。このころの彼の心身の状態を知るため、20日付の次のような両親宛の手紙を読んでみよう。「僕は非常に疲れ、力なく、何をする意欲もありません。[...]僕は病気ではありません。ただ、今まで全く知らなかったような、新たな無気力状態にとらえられています。[...]頭の中は全く燃えるように熱いのに、足はいつも氷のように冷いのです」と述べ、さらにヘルヴェークの歌の文句「私は夕焼けのように消え去りたい」を引用しているのである。³⁸23日から4月22日までは医師の勧めで家に帰り、翌23日から5月7日まで再び神学校に戻り授業を受ける。しかし同7日牧師のクリストフ・ブルームハルトの治療を受けるためバート・ゴルへ連れて行かれる。6月20日にはピストルで自殺をしようとする。(これは15歳のヘッセより7歳年上のオイゲーニエ・コルプ嬢への失恋の痛みによる。シュナイダーは作中のハンスのエンマへの失恋体験をこの事実に対応させている。³⁹)22日には母が彼を今度はシュテッテン・イム・レムスタール(シュトゥットガルト近郊)の精神病院へ連れて行く。8月5日カルフへ戻り、15日ロイトリンゲンのギムナジウムの入学を断われ、22日再びシュテッテンへ行く。このころの死を望む彼の手紙を次に挙げよう。まず9月1日の両親宛の手紙には、「死とひきかえになら、忘却の川レーテとひきかえになら、どれほど多くのものをさし出すでしょう」と書き、また11日の同じく両親宛の手紙では、「あなた方がもしも私の心の中を、唯一の光の点が地獄のように灼熱して燃えているこのまっ暗な洞窟を覗き見ることができたならば、僕には死が願わしいと思ひ、それを許して下さるでしょう」⁴⁰と述べている。さらに14日には父に宛て、「拜啓⁴¹

あなたがかくも奇妙なほど献身的なところを見せてくださるのですから、7
マルクかあるいはすぐさまピストルをお願いしてもよろしいでしょう。あなた
は私を絶望させた後、恐らく喜んで私を即座にこの絶望から解放し、ご自
身は私からのがれる用意がおありのことでしょう。本当はもう6月にくたば
るべきだったのです⁴²」と書いて自殺を仄めかしている。10月5日から11月4
日まで保養のためバーゼルに滞在するが、このころの母宛の手紙もまた死へ
の憧れを表わしている。「大きな滔々と流れるライン川のほとりを通りすぎ
る時、このなじみの優しい波の中で死に、私の命と罪とが忘れられ消えたなら、
どんなにすばらしいことだろうと何度思ったことでしょう。」⁴³（これはヘ
ッセ文学によく現われる水による自殺のモチーフの例証としてシュナイダー
が引用しているものである。）11月7日ようやくヘッセはカンシュタットの
ギムナジウムへ入学する。ここで若い教師カプッには信頼を寄せるが、翌
1893年1月20日には再びピストルを買う。遂に10月15日には、たえざる頭痛
に悩み自らの希望で退学するに到る。（作品に描かれているように、すでに
ラテン語学校時代からヘッセが頭痛に悩んでいたかどうかは定かではない。）
10月26日エスリンゲンのS.マイヤー書店に勤めるが、三日で逃げ出してしま
う。11月3日診察を受けにヴィンネンデンのツェラー医師の許へ行く。これより
翌1894年5月まで、父の仕事を手伝うかたわら祖父や父の蔵書を読むが、6月5
日から翌1895年9月19日までカルフにある時計工場へ勤めに出る。職人生活を
始めて一年後の6月には、姉のアデーレから熱心に英語を学び、また数学や農
業に関する知識を身につけ、二、三年間ブラジルのリオ・グランデ・ド・スル
へ移住することを考えるが、10月にテュービンゲンのヘッケンハウアー書店に
入り、1899年7月までほぼ四年間勤めるのである。この間、カルフですでに独
学で始めていた文学の勉強を仕事のかたわら続けるのである。⁴⁴ここで注目す
べきことは、自発的に決意した機械工場での勤務が一年三か月にも及んでいる
ことである。これは小説中の主人公がわずか三日後に自殺するのとは非常な相
違点といわねばならない。ケースターはこの事実から、ヘッセにはこの時ある種
の自己克服があらわれたものと推測している。⁴⁵しかし、実は機械工になる直前
の5月にはすでにヘッセの精神状態は安定の方向に向かっていたことが、カン
シュタットのギムナジウム教師カプッ宛の手紙からわかるのである。「今はじめ
て私は徐々にではありますが、再び落ち着きと朗らかさを見いだし、精神的に
健康になりました。[...] 怒りと憎悪と自殺の思いでいっぱいだった時期を私
は後にしました。ともかく

も、それが私の詩人としての自己を形成したのでした。この上なく激しく荒れ狂った疾風怒濤の時期は克服されています。⁴⁷ ケースターは最終的な危機の克服は、ヘッセがヘッケンハウアー書店の店員として無事勤めあげ、他方本格的に文学活動に入りはじめたチュービンゲン時代の後の二年間としてい⁴⁸る。

このようにヘッセの実生活をやや詳細に眺めてくると確かにバルの、「かの年月の伝記的な個々の事実は『車輪の下』で描かれているよりも厳しくかつ切迫したものである⁴⁹」という言葉が実感をもってくるのである。ところで、ヘッセとマウルブロン神学校との関係は、ケースターによれば、彼はこの学校のヘラス室に入れられたが（作中と同じ）、何ら困難なく慣れ、したがって最初からこの新しい雰囲気嫌っていたと推測するのは当らず、生徒たちに課せられた要求は高いにもかかわらず、体育と音楽の時間を除いて授業は彼に喜びを与え、また同級生との交友関係にも満足していた。⁵⁰そしてオットー・ハルトマンやフランツ・シャル、ヴィルヘルム・ヘッカーやグスタフ・ツェラーとは終生親交を結ぶこととなった。⁵¹ところがここで彼は「はっきりした外的な原因や十分な理由もなく⁵²」突然脱走するのである。ヘッセ自身は『自伝素描』（1925）の中でその原因を「内面からの嵐に襲われた⁵³」ためと書いているが、高橋健二氏はその動機を内的動機と外的動機にわけて考えておられる。⁵⁴それを要約すれば、まず外的動機として厳しい寮生活と教育による締めつけ、一方、内的動機としては、詩人になりたいという欲求の抑圧とその結果鬱積された感情の爆発ということになる。まさしくこれは神学校の閉鎖性に強く反発し、空想と自由に憧れるハイルナーの態度に通じるものがある。いずれにせよ、このマウルブロン体験は、後の『ナルチスとゴルトムント』（1930）や『ガラス玉演戯』（1943）に現われる修道院モチーフの出発点となるものであり、ヘッセの文学活動上極めて深い意味を持つのである。

以上、主として若き日のヘッセ自身の体験が主人公ハンス・ギーベンラートおよびその友人ヘルマン・ハイルナーにどのように反映しているか、現実とフィクションとの符合点がどこにあるか、おおよその検討をしてきたが、最後に後年ヘッセ自身が本作品について述べているところに目を向けてみたい。1936年の『ハンスの思い出』（この場合のハンスはヘッセの弟）の中で彼は次のように述べている。「ラテン語学校はわたしにとってもとかくいざこざを起したが、ハンスにとっては時とともに悲劇になった。わたしの場合

とは事情も原因も異なっていたけれども。——わたしが後に若い作家として小説『車輪の下』で、憤りをもって、この種の学校をやり玉にあげたとすると、わたし自身の生徒生活とほとんど同様に、弟の難渋した生徒生活が、その原因になった。⁵⁵そして続けて、弟の従順さ、権威を認める性質、物覚えが悪く勉強に骨が折れたこと、そういう生徒をいじめる教師たちのことが描かれている。ポウルピイは、「ハンス・ギーベンラートとその著者との同一視可能な程度は非常に限られている。とくに、この小説の後の方の章においてはそうである。はじめの方の章においてさえ、彼は部分的には、同じくハンスという名のヘッセの弟を映したものであるといってもよい⁵⁶」と述べ、とくに弟ハンスの学校生活の苦しみを例証するため先のヘッセの言葉を引用している。そして彼が無意味な仕事につき、未来に対する希望なく、その夢が「後向きに、楽園へ、幼年時代へ」⁵⁷向いていたことを指摘している。またローズは、「この物語は部分的にのみ自伝的で、主として、はにかみがちな内向的人物として、彼に効果的な習慣を身につけさせようとする教育者たちから悩まされるヘッセの弟ハンスの不幸な学校体験に基づいている⁵⁸」と述べている。確かにヘッセの弟ハンスの素直で内気な性格、幼年時代への退行現象などを考慮すると、彼はギーベンラートと類似性をもってはいる。また、ハンスという名の共通なことも多分に暗示的ではある。しかし、これもあまりに同一視することはやはり不自然であろう。なぜなら、同じく学校生活の苦しみといっても、抜群の成績を誇り旺盛な勉強意欲をもち教師たちから多大の期待をかけられたギーベンラートと、逆に成績のかんばしくないヘッセの弟とでは、その内容はおのずから異なっているといえるからである。ギーベンラートの自殺をヘッセの弟のそれと関連づけるのはもとより不可能である。後者の自殺は、この小説が書かれた三十年後の1935年、彼53歳の時だからである。

ヘッセはいわば過去の自分と弟の姿の渾然一体となったものの中から、作中のハンスとその友人のハイルナーを形成したといえよう。さらに後にヘッセは『過去とのめぐり会い』(1951)の中で次のように述べている。「友だちハイルナーもまた共演者として相手役としてハンスの仲間になっているのだが、小さいハンス・ギーベンラートの身の上と人物とを通して、私はあの成長期の危機を描き、その記憶から自分を解放しようと思った。その試みに際して、自分に欠けていた達観と成熟とを補うために、私はあの力に対して、すなわち学校や神学校や伝統や権威というような力に対して、ギーベンラー

トがそれに敗れ、私自身もかつて敗れそうになった力に対して、いささか弾劾者、批判者の役を演じた。⁵⁹」(圏点は筆者)ヘッセが詩人になる前の自分の激しい体験を作品として客観化し、それによってかの若き危機の日に荒れ狂った力を冷静に眺めたいという、やみがたい気持が創作の動機になっていることは明らかである。

文 献

作 品

Hermann Hesse, *Gesammelte Schriften* I, IV, VII. Berlin/Frankfurt a. M. : Suhrkamp 1958. (=GS. I, IV, VII) [但し, 『車輪の下』(GS. I) からの引用の場合には, 引用文の直後にページ数のみを記す。]

[邦訳書]『車輪の下』高橋健二訳, ヘルマン・ヘッセ全集第2巻, 新潮社, 昭和34年。同新版昭和57年(『ハンスの思い出』を含む)。

『車輪の下』岩淵達治訳, 旺文社, 昭和53年。(旺文社文庫)

『幸福論』高橋健二訳, ヘルマン・ヘッセ全集第14巻, 新潮社, 昭和35年。(『過去とのめぐり会い』を含む)(『車輪の下』の訳文は上記のものを参照ないしは拝借させていただいた。また『ハンスの思い出』, 『過去とのめぐり会い』については高橋氏の訳文をお借りした。)

書 簡

Ninon Hesse (Hrsg.), *Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert. Hermann Hesse in Briefen und Lebenszeugnissen 1877-1895*. Frankfurt a. M. : Suhrkamp 1966. (=KuJ)

Hermann Hesse, *Gesammelte Briefe*. Bd. I 1895-1921. In Zusammenarbeit mit Heiner Hesse herausgegeben von Ursula und Volker Michels. Frankfurt a. M. : Suhrkamp 1973. (=GB. I)

ヘッセに関する参考文献

H. Ball, *Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk*. Fortgeführt von Anni Carlsson und Otto Basler. Zürich: Fretz & Wasmuth 1947. (=Ball)

F. Böttger, *Hermann Hesse. Leben • Werk • Zeit* Berlin: Verlag der Nation 1974. (= Böttger)

M. Boulby, *Hermann Hesse. His Mind and Art*. Ithaca/London: Cornell University 1970. (=Boulby)

A. Hsia (Hrsg.), *Hermann Hesse im Spiegel der zeitgenössischen Kritik*. Bern/München: Franke 1975. (=Hsia. 但し, 執筆者名はページ数の後に括弧で

示す。)

- R. Koester, *Hermann Hesse*. Stuttgart: Metzler und C. E. Poeschel 1975.
(=Koester)
- J. Mileck, *Hermann Hesse. Life and Art*. Berkeley/Los Angeles/London:
University of California Press 1978. (=Mileck)
- M. Pfeifer, *Hesse-Kommentar zu sämtlichen Werken*. München: Winkler 1980.
(=Pfeifer)
- E. Rose, *Faith from the Abyss. Hermann Hesse's Way from Romanticism to
Modernity*. London: P. Owen 1966. (=Rose)
- H. R. Schmid, *Hermann Hesse*. Frauenfeld/Leipzig: Huber & Co. 1928.
(=Schmid)
- C. I. Schneider, *Das Todesproblem bei Hermann Hesse*. Marburg: N. G.
Elwert 1973. (=Schneider)
- S. Unseld, *Hermann Hesse — eine Werkgeschichte*. Frankfurt a. M.: Suhr-
kamp 1974. (=Unseld)
- B. Zeller, *Hermann Hesse in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Reinbek
bei Hamburg: Rowohlt 1963. (rowohlts monographien 85) (=Zeller ①)
- B. Zeller, *Hermann Hesse. Eine Chronik in Bildern*. Frankfurt a. M.: Suhr-
kamp 1960. (=Zeller ②)
- 高橋健二, 『ヘッセ研究』 ヘルマン・ヘッセ全集別巻, 新潮社, 昭和35年。(=高橋 ①)
- 高橋健二, 『ヘルマン・ヘッセ——危機の詩人』 新潮社, 昭和49年。(=高橋 ②)

その他の文献

- Friedrich Nietzsche, *Werke*. Herausgegeben von Karl Schlechta. München:
Carl Hanser 1966. (Lizenzausgabe für die Mitglieder der Wissenschaft-
lichen Buchgesellschaft, Darmstadt) (=Nietzsche)

注

- 1 Zeller S. 58-59; Unseld S. 25; Böttger S. 128; Pfeifer S. 89. なお, 成立の
時期については, とくに Pfeifer S. 89 に詳しく記されている。ヘッセは1903年10月
はじめから1904年8月はじめまでカルフに滞在した。『車輪の下』は1903年10月から
12月までの3か月間で出来上り, 12月28日には原稿を S. フィッシャーに送って『新
評論』(*Die Neue Rundschau*) に掲載を頼んだ。ところがフィッシャーは翌1904年
1月9日, 次の年でないことと載せられないことを知らせた。そこでヘッセは『新チュ-
リヒ新聞』に申し出, 4月には手を加えるためフィッシャーから原稿を返してもら
う。そして翌1905年4月5日から5月17日まで同新聞に連載されるのである。(連載

された年が1904年と Pfeifer にあるのは誤りである。Unselde S. 25, 高橋^④ S. 105 には1905年とある。)つまり1904年4月から、翌1905年5月に新聞に出るまでの間、ヘッセは原稿を手許に置いていたことになるが、いつの時点で最終的に完成されたかは必ずしも定かではない。ここでは Unselde と Zeller に従って1904年としておく。なお、ヘッセがガイエンホーフェンへ移ったのは1904年8月10日である。

- 2 Pfeifer S. 39-40; Zeller ^⑥ S. 208-214 (人名索引).
- 3 Zeller ^④ S. 59.
- 4 Böttger S. 128.
- 5 Böttger S. 129; Boulby S. 41; Mileck S. 34; Schmid S. 77; Zeller ^④ S. 59.
- 6 Boulby S. 39. ボウルビーが引用しているニーチェの詩は次の通り。(Nietzsche S. 77)
 Freilich weiß ich recht wohl: Schuljahre sind schwierige Jahre,
 Nie wird jegliche Last, Mühe und Arbeit gescheut.
 Oft auch möchte die Seele sich los von den hemmenden Fesseln
 Reißen, in Einsamkeit flüchten das fühlende Herz;
 Aber auch diesen Druck erleichtert die treuliche Freundschaft,
 Die sich stets voll Trost, voll von Erhebung uns naht.
- 7 Boulby S. 39.
- 8 Boulby S. 40.
- 9 Böttger S. 128.
- 10 Böttger S. 128.
- 11 Boulby S. 40-41.
- 12 GB. I. S. 130. 1904年11月25日付 Karl Isenberg 宛の手紙 (Unselde S. 24 に引用)
- 13 Hsia S. 63 (Th. Heuss).
- 14 Böttger S. 134.
- 15 本作品がヘッセの生地カルフを背景にしていることは、Pfeifer S. 91-102 の詳細な注から明らかである。一例をあげると、「二つの大きな噴水」(380)の注では、「実際にカルフの町の広場には二つの噴水がある」(Pfeifer S. 92) というように説明がなされている。
- 16 „In wenigen Wochen sollte das ‚Landexamen‘ wieder stattfinden.“ (377)
- 17 GS. I S. 495 終りから3行目 (Das Giebenrathsche Haus stand [...])~502.
- 18 Boulby S. 47. 「隠れ馬」(stalking horse) とは獵師が獲物に近づく時にその陰に隠れるための馬形のもの[研究社『新英和中辞典』第3版(1971年)]
- 19 少年ハンスは、「寝不足な顔、青いくまのできた疲れた目」(380)になり、美しい額には細いしわがびくびく動き、腕と手は細く(380)、首も細く、胸にも背中にも肋骨

を数えることができるほどで、ふくらはぎは無いも同然である (407)。頭痛あるいはそれと関係があると思われる身体症状を以下に列挙する。州の試験の前日、ラテン語学校の校長のところへ、いとまごいに行った帰りに起こる頭痛—— „Zwar hatte er [Hans] *Kopfweh*, aber heute brauchte er ja nichts mehr zu lernen.“ (380) つないである筏の上に横たわり、頭痛のしなかった昔を思い出す場面—— „Er [...] versuchte, sich vorzustellen [...], alles wäre wieder wie sonst, da er [...] noch kein *Kopfweh* und keine Sorge hatte.“ (385) 自分の勉強部屋での「疲労と眠気と頭痛」(386) との戦い。シュトゥットガルトで叔母から受験者数の多いことを聞かされた後で催した頭痛—— „Zu Haus bekam er *Kopfweh*, wollte wieder nichts essen und war so desperat, [...]“ (389) 州の試験のギリシア語の時間に起こった頭痛。(393) 試験の不出来を頭痛のせいにし腹をたてる場面—— „Das dumme *Kopfweh!*“ (398) (以上第1章) 夏休みの魚つりの最中に感じる頭痛—— „Hans hatte ein wenig *Kopfweh*, aber nicht so stark wie sonst, [...]“ (406) 夏休みのある日、散歩から帰った時の頭痛。(414) 新約聖書のギリシア語に没頭している時に覚える頭痛。(417) やがて浅い眠りにともなう「軽い頭痛」(417)。休暇の最後の週の魚つりの時に起こる頭痛—— „Er hatte viel *Kopfweh* und saß ohne rechte Aufmerksamkeit am Ufer des Flusses, [...]“ (422) (以上第2章) マウルブロン神学校入学後ハイルナーと友情をむすび、彼の憂鬱症に悩まされ勉強が困難になってきた時に、またしても起こってきた頭痛—— „Daß das alte *Kopfweh* wiederkam, wunderte ihn nicht weiter; [...]“ (450) クリスマスで帰郷した時、ハンスの健康状態を気づかう人々に、「たびたび頭痛がするだけだ」(457) と身体の不調を否定するところ。(以上第3章) こうした頭の変調と何らかの関係があると思われる想像力の異常な高まり。(歴史上の英雄や新約聖書の世界がありありと眼前に浮ぶ状態) (470) 医者が診断を下した「一時的な衰弱、一種の軽い目まい」(477)。(以上第4章) 夏休み前の神学校での授業中の脱力状態と痙攣と泣きじゃくり。(486) 故郷へ帰る汽車の中での「激しい頭痛」(488)。休養のため森の苔の上に寝ころんでいる時の「重い頭」。本を読もうとすると必ず痛み出す頭と目。(491) (以上第5章) 憂鬱と死の願望。(504) (第6章) 職人仲間の宴会の後、父との諍いや翌朝の工場出勤を思い痛み出す頭。(502) そして最後に、死の直前りんごの木の下に横たわり不愉快な感情や不安にさいなまれて催す頭痛—— „*Kopf und Augen taten ihm weh*, und er fühlte nicht einmal so viel Kraft in sich, um aufzustehen und weiterzugehen.“ (543) (以上第7章) (イタリックはすべて筆者) 結局ハンスは、頭痛を知らなかった幼年時代を除いて、死に到るまでこの持病に苦しめられたわけである。そして異常なほど繰返し述べられる頭痛は、かの白昼夢の状態に到るまでの周到な伏線とも考えられ、同時に彼の人生が下降線をたどって行くことの暗示ともなっているといえよう。

- 21 Böttger S. 133.
- 22 <gerädert> は本来「車裂きの刑に処せられた」という意味である。シュナイダーは本小説の標題 *Unterm Rad* に関連づけて用いたのであろう。
- 23 Schneider S. 145.
- 24 Schneider S. 147.
- 25 Schneider S. 134.
- 26 Pfeifer S. 36.
- 27 Zeller ④ S. 21.
- 28 KuJ S. 153. 1953年6月9日付ゲッピンゲンのホーエンシュタウフェン実科高等学校の生徒たち宛の手紙。(Pfeifer S. 91 に引用)
- 29 Pfeifer S. 93.
- 30 Pfeifer S. 93.
- 31 Pfeifer S. 36, 92.
- 32 Pfeifer S. 93.
- 33 Pfeifer S. 93.
- 34 Pfeifer S. 15, 95.
- 35 Mileck S. 36.
- 36 Mileck S. 36.
- 37 以下、この期間の詳細な日付と個々の伝記的事実は、とくに注をつけない限り、Pfeifer (S. 36—38) による。
- 38 KuJ. S. 194. (Zeller ④ S. 28に引用)
- 39 Schneider S. 145.
- 40 KuJ. S. 250. (Schneider S. 143に引用)
- 41 KuJ. S. 265. (Schneider S. 143に引用)
- 42 KuJ. S. 268. (Schneider S. 143—144に引用)
- 43 KuJ. S. 287. (Schneider S. 144に引用) なお、「このなじみの優しい波の中で」(in diesen bekannten, lieben Wellen) は、Schneider では<bekannten>のところが<unbekannten>になっている。
- 44 Koester S. 22.
- 45 高橋 ④ S. 63.
- 46 Koester S. 21.
- 47 KuJ. S. 468. (Zeller ④ S. 30に引用)
- 48 Koester S. 22.
- 49 Ball S. 66.
- 50 Koester S. 20.
- 51 Zeller ④ S. 27. Otto Hartmann—後にゲッピンゲンの市長になる。(Koester

- S. 20) Franz Schall——後にアルテンブルクの高等学校教師になる。ヘッセの『ガラス玉演戯』のモットーの部分でラテン語に翻訳する。(Zeller ⑥ S. 212; Koester S. 20) Wilhelm Häcker——後にブラウボイレンの下級高等学校の校長になる。(Pfeifer S. 179) Gustar Zeller——後にハンブルクの高等学校教師になる。(Pfeifer S. 135)
- 52 Zeller ④ S. 27.
- 53 GS. IV. S. 473.
- 54 高橋 ⑥ S. 48—51.
- 55 GS. IV. S. 702. (Unselde S. 24; Pfeifer S. 90; Boulby S. 53 に引用)
- 56 Boulby S. 53.
- 57 GS. IV. S. 715. (Boulby S. 54 に引用)
- 58 Rose S. 52.
- 59 GS. VII. S. 874. (Unselde S. 26; Pfeifer S. 90 に引用)